

古墳時代後期の小札甲にみる地域性

－ 緘孔2列5個型小札の導入の様相 －

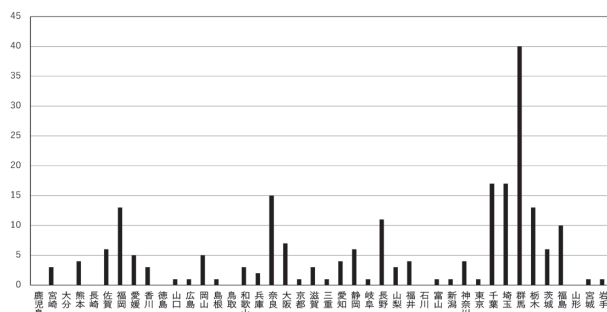
田邊 凌基

キーワード：小札甲、古墳時代後期、緘孔2列型小札、副葬武具、第三緘孔

はじめに

関東地域における古墳時代後期は、畿内では収束に向かう前方後円墳の造営が盛行する時期であり、各地に大規模な古墳群が形成されるようになる。『前方後円墳集成』編年における8期以降、北武蔵や上毛野、下毛野などの地域でも墳長100mを越える大型前方後円墳が築造されるようになり、その後各地域では造墓地が移動しながら後期にかけて集約的な地方古墳築造が盛んになっていく。副葬品においては馬具や甲冑の副葬例が首長墓を中心に増加するとともに分布傾向が東国における集中を顕著に示している（第1図）（鈴木・高橋2014）。

後期の北関東地域を核とする東日本地域への甲冑出土例の集中については畿内政権が担っていた武具分配の管理システムの変化を理由とする清水和明の論（清水1993a）を支持する研究が多い一方で、東日本各地域内での差異を捉え各地での供給の様相にまで迫った研究は多くない。後期の前方後円墳築造の盛行を考えるうえでは後期造墓集団間の繋がりを明らかにしていく必要があるが、基本的に古墳に1領のみが納められる小札甲は副葬武具の中でも被葬者の階層や役割とより直接的に関わるものであり、副葬武具の中でも重要な遺物である。資料点数が限られるゆえに列島全体の出土資料によって型式設定がなされてきた小札甲研究だが、副葬武具の供給の具体的なプロセスを明瞭なものにするためには地域研究的なアプローチが不可欠であると考えられる。そのため本稿では地域的な分析に基づいた型式分類の可能性について考察していく。



第1図 古墳時代後期の各地域の甲冑出土数

1. 小札甲研究史

1-1. 小札甲研究の視点

古墳の編年は主に墳丘や埴輪の研究によって設定されているが、古墳時代における文物の動きや詳細な地域間の交流の様相を考えるうえでは古墳に副葬された副葬品からの分析が有効である。

短甲や馬具に用いられる鉋留技法と共に中期後半以降国内に広まった小札甲は、基本的に1領、多くとも2領分が古墳に副葬され、畿内大型前方後円墳を中心に大量の埋納事例が見られる短甲とは一線を画した保有形態を示す。それゆえより上位の古墳にのみ副葬されたものと考えられ、各地の首長墓からの出土がほとんどである（清水1993a）。

副葬品の中でも鉄製武具は出土時の残存状態によって得られる情報量が大きく変化するため、多角的な分析視点が求められてきた。古墳時代中期末まで主流であった短甲における研究では、畿内大型前方後円墳における大量埋納事例に代表されるように資料数が比較的多いことや完形を保って出土することが多い構造上の特徴などが手伝ったこともあり、詳細な編年や製作技法分類など一定の成果がみられる（阪口2019）。一方で、古墳時代後期に主流となる小札甲においては、小札と呼ばれる鉄板片を連結するその構造ゆえに離散した状態や一部のみの状態での出土が大半であるため、分析要素に関して制約が多い。

それゆえ小札甲は後期関東地域における出土例の極端な集中など古墳時代後期社会の様相を反映していると思われる特徴を持ちながらも、関東地域の各古墳における共通性などに言及する地域研究的な分析は未だ十分なものではない。資料の分析視点に関しては一定の充実がみとめられるが、副葬甲冑から具体的な社会動態を明らかにする作業に関しては研究のさらなる深化が求められる。

1-2. 分析方法の変遷

小札甲の研究は末永雅雄によってその基礎が作られ、小札の形態分類や小札を紐で連結する緘や綴の技法など

小札単位で観察できる要素に関する研究手法が確立された（末永 1944; 1979）。小札研究とも言うべき詳細な資料整理に始まる構造検討によって、小札甲の製作集団・製作技法に関する変遷観を設定し副葬された時代観について言及する研究方法が可能となった。

小林謙一は連結技法の復元とそれによる甲冑構造の想定の一環に基づき小札を連結する緘と綴の技法の分類を設定した（小林 1988）。遺存が観察できる資料より連結方法の差異を明らかにし、そこから甲冑の製作工程を検討する可能性を示した。

90年代に入ると清水和明がこうした小札諸要素に基づく具体的な形式を設定する。清水は、連結技法や小札形状の違いが完形の甲の武具としての性能に及ぼす影響は少ないとした上で、多様に分化している小札甲の形式の違いは製作集団の選択によるものだとし、これらを整理することで工人集団や小札の変遷観についての指摘が可能になるとした（清水 1993a）。小札甲の製作者や製作技法に関する変遷観が設定されたことで各資料の型式分類が整理され、また副葬された古墳の時代観についても間接的な言及を行うことが可能となった。

清水は小札甲の種類を襦褌式と胴丸式の2種類におく末永の論に基づいた上で、国内で出土している胴丸甲資料を分類し、小札の形状と緘技法、緘孔列配置のバリエーションに基づいた分類によって列島各地の古墳から一般に出土している胴丸式小札甲についての10型式を示した。清水により設定された10型式では、各型式の指標となる甲冑資料に基づいて小札の配置が分類され、この各型式の導入時期を整理した中期～後期の時期の小札甲の変遷が設定されている。

内山敏行は清水の分析視点に基づいた上で後期以降の小札甲や付属武具の分類の細分化を行い、そのうえで古墳時代の武具の集中に関する考察を加えている。内山は中期末から後期にかけての小札型式の変化を整理し各段階の画期を設定している（内山 2006）。中期末より国内の小札甲に見られる系統差が明確になることを示し、各資料に表れる特徴を比較し時期ごとに分類した。後期に在来型の系統から外来型の系統への移行が起こり、終末期・奈良期の資料がこれに後続するという流れを示した。また東アジア地域間での小札武具の比較も盛んにおこなわれるようになる。清水は日本の資料と東アジアの4・5世紀の資料とを比較することで列島出土小札甲の系譜の源流を追い、S字型小札など大陸系の特徴をもつ資料や列島半島との繋がりを示す資料など、外来系小札甲の複数のまとまりを見出した（清水 1996）。内山は後期の緘孔2列小札に見られるΩ字型形状と緘孔の配置に基づいて各資料を分類し、朝鮮半島出土資料との比較を通し

て搬入品と定型化資料との区別を行った（内山 2008）。型式変遷の整理と分類要素の細分化が行われたことで、より詳細な分析が有用であることが示され、さらに資料の増加によって小札形状のみにとどまらず小札甲構造にも言及することが可能となった。

2. 先行研究

2-1. 小札型式の分類

小札甲は末永雅雄によって襦褌甲と胴丸甲に分類されている（末永 1979）が、古墳時代の出土資料の多くは胴丸甲に分類されるものと考えられている。胴丸甲は一連の小札連結具を正面で引き合わせるようにして着装する小札甲である。構造の把握が可能な資料が少ないために甲冑としての詳細な分類は難しく、従って基本的には小札の分類によって甲冑資料の型式設定がなされている。

型式は清水が分類・設定したものが研究の基礎をなしており、小札形状と連結に使用する孔の配置や個数といった要素による分類が一般的な方法となっている。小札の頭部形状によって円頭小札、方頭小札、偏円頭小札の分類が設定される。また小札上部の緘孔が縦1列に並ぶか2列が並行するかによって緘孔の列が区分される。緘孔については、第三緘孔と呼ばれる中央部の孔の有無によっても分類が分かれる。小札下部の綴孔の個数についても同様に分類が設定されている（第2図）。

	2 個	3 個		緘孔一列	緘孔二列	併用
	2-1 個	4-2 個	2-2 個			
緘孔一列			●一緘孔 ○一綴孔 ○一下部・覆輪孔 数字は緘孔の番号			
緘孔二列						

第2図 孔配置に基づく小札の分類

2-2. 連結技法の分類

小札同士の連結は各部に穿たれた孔に組紐や革紐を通して綴じ合わせることで行われる。紐は有機材であり部分的な痕跡のみが観察できるものがほとんどであるため緘技法の分析は小札形状以上に遺存状態に左右されるが、観察可能な資料に基づいて型式設定がなされている。基本的には、小札の上部に開く緘孔及び小札下部に開く

綴孔を用いて連結を行い、段ごとの小札列は小札最下部に設けられた下捌孔で覆輪と下捌を施される。

①綴技法

小札列は各小札を重ねた状態で連結するが、綴は小札の端部に配される孔で重なり合う2枚の小札を固定する際に用いられる技法である。綴の技法は吉村和昭によって2種類に分類され、第一技法と第二技法の分類が設定された(吉村 1988)。第一技法は各孔を順番に1回ずつ通していく方法で、第二技法においては裏から表に通す際に一度回してから同じ孔を再度通るように綴じる方法である。第二技法においては裏面から見た際の紐列が鋸刃型を呈するようになる(第3図)。

②緘技法

連結部が固定される綴と違い、緘の連結では可動性が確保されるという特徴がある。帯板の連結に使用される緘第一技法と小札式甲冑に使用される緘第二技法とに大別され、小札に使用される緘技法はさらに綴付緘・通段緘・各段緘に分けられる(清水 1993a)。

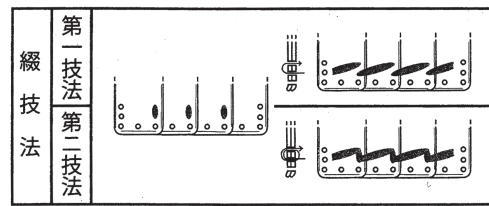
綴付緘は名称の通り、次に紐を通す孔を横方向にずらすことで綴を兼ねる形になる緘技法のことである。通段緘は縦方向に連結していく技法で、一本の紐が縦方向に進むようになる。各段緘は上下2列ごとに各段を連結していく技法であり、縦→横→縦という方向に紐が進み全体的には横方向に小札を連結していくものになる。

また、緘孔が1列のものと2列のものとでは使用する孔が異なってくる。第三緘孔の有無によって、各緘技法には第三緘孔を使用する場合と使用しない場合の2種類が設定できる。第三緘孔を使用するものを各段緘a類、使用しないものを各段緘b類と呼称し、以上の各要素の組み合わせによって緘技法の分類設定が行われる(第4図)。

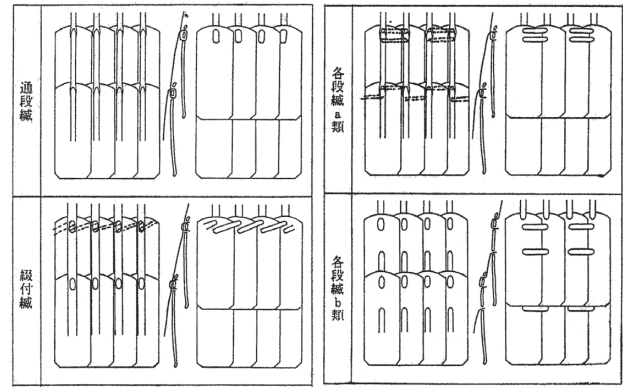
綴や緘の技法は孔の配置によっては互換性がない組み合わせも想定できるため、基本的には小札製作段階での設計思想に基づいて連結技法も選択されるものと考えられる。一方で、資料によっては複数型式の小札が使用されている場合や(初村 2011a)、単体の小札に複数型式の孔配置がみられ再利用が想定できるような場合(内山 2000)もあり、各小札甲の連結製作工程は必ずしも同一ではなかったことが伺える。

2-3. 小札甲変遷過程における契機の設定

清水の型式および系統と変遷観の枠組みに基づき内山敏行は列島内定型化以後の小札甲系統の変遷を整理している(第5図)(内山 2006)。国内における小札甲の定着期は中期後半の円頭緘孔2列型の定型化段階とされ、古墳副葬甲冑は初期の半島系の特徴をもつ小札甲から円



第3図 綴技法の分類



第4図 緘技法の分類

頭緘孔2列の国内型小札に切り替わる。中期末にはこれと一部平行する形で緘孔1列型もしくは兩型式併用の小札甲が存在するが、中期～後期の転換期にはそれほどまとまった型式変化は見られない。

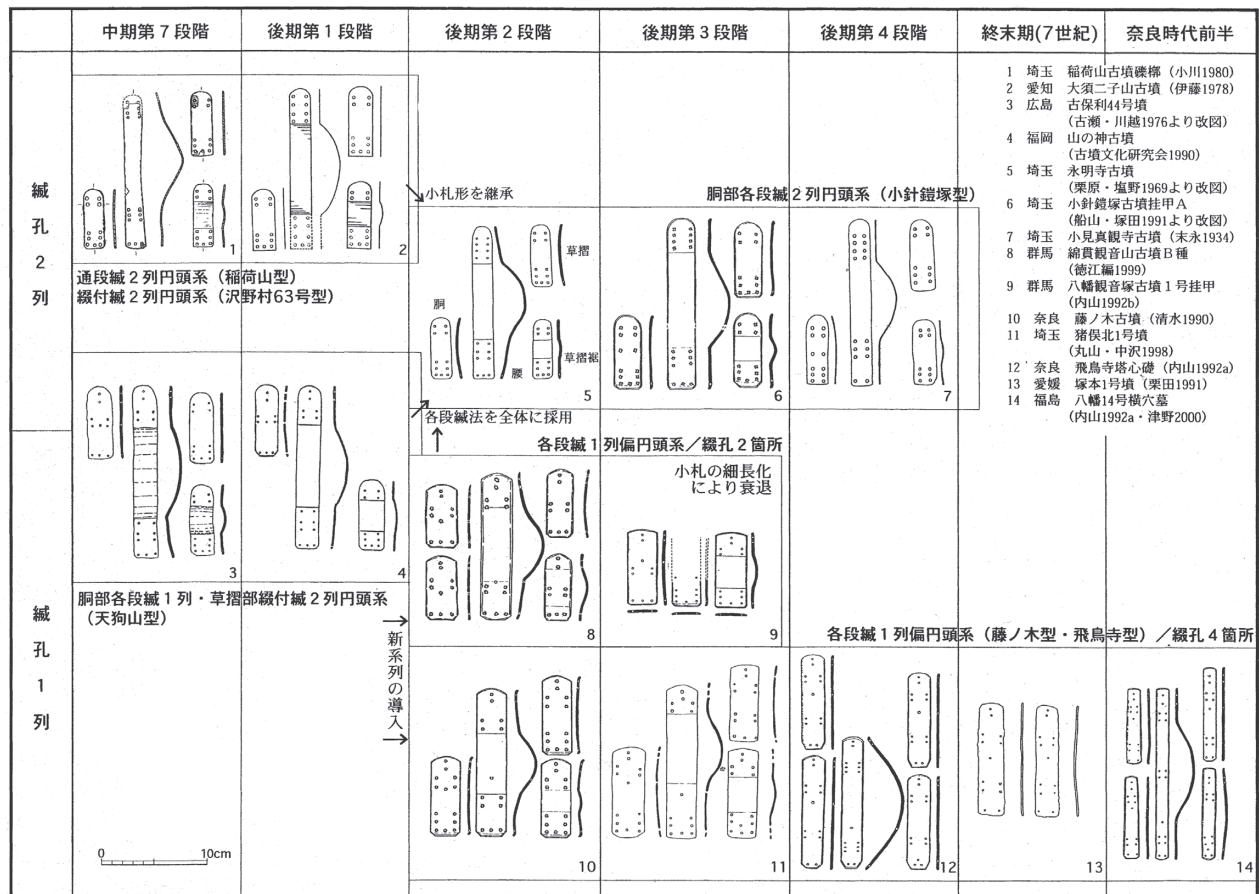
後期中頃、内山編年の後期第2段階より新系列の偏円頭緘孔1列型が出現する。円頭緘孔2列型は7世紀初頭には衰退するが、偏円頭緘孔1列型はその後各時期に系譜を追うことができる。終末期及び奈良時代以降の小札もこの緘孔1列型の緘技法を継承しており、古墳時代の緘孔1列型に連なるものとされている。偏円頭緘孔1列型は外来系の小札であり、内山が「舶載品ラッシュ」期と評する、馬具や武器において外来系技術の導入が盛行する6世紀後半の時期に入ってきた型式と考えられる(内山 2012)。

導入の様相については、同一個体での併用があることや緘孔2列型式が終末期まで存在していることなどからみて、徐々に代替が行われたとみられ、地域や権力集団によって時期差が存在すると思われる。

2-4. 後期における新型式導入の様相

後期・終末期から奈良時代にかけて系譜をたどれる緘孔1列型式導入の契機となる時期は藤ノ木古墳の段階にもとめられる。後期には天狗山古墳や一夜塚古墳などの古墳で緘孔1列・2列の併用の可能性をもつ出土例がみられ(初村 2011a, 野崎 2014) 緘孔1列への移行がこれに続くことから、この時期に変化があったとみるのは妥当といえる。

またこの段階には小札同士を紐で連結する緘技法にも



第5図 後期の小札系統の変遷

変化が起こり、通段緘から各段緘への移行がみられる。初村武寛による編年においてもb類緘技法導入は偏円頭小札導入のやや前の段階に位置付けられている(初村2018)。先述したように緘技法は緘孔の配置によって制限されるため基本的には完成形を想定した上で小札の設計が選択されていたと考えられるが、新型式導入の前後に各段緘技法が一様に出現していることを鑑みても緘技法と小札孔配置は連携する要素とみることができる。

緘孔配置・緘技法・小札形状の分類に加えて細かい法量の違いなども考慮に入れた場合、副葬小札のバリエーションはかなり豊富であることがうかがえる。大まかな製作技法に則りながらも個別の小札資料にはそれぞれの特徴が見受けられ、小札甲製作に携わった集団が必ずしも少数ではなかったことが想定できる。

2-5. 小札甲研究の現状と課題

こうした小札連結技術の種類は、武具としての機能には直接的には大きく影響を及ぼさないとされており、また必要となる技術力にも大差はないため、基本的に製作者集団の系譜を表す基準であると考えられている(清水1993a)。しかし小札甲の分類は遺存が良好な全国的な資料に基づいて設定されているため、個々の資料の具体的

な共通性は明らかではなく、技法の更新の詳細な時期や各出土古墳ごとの小札甲製作集団の動向にまで迫るには情報が不足している。新系統の出現や緘孔2列型系統の分岐など、内山編年における後期2段階を境とする小札甲形態の多様化の現象は、個々の出土古墳被葬者の階層にも関わる問題であるため検討の意義は大きい。

そのため特定の型式に着目した分析を行い型式の分布を検討する必要がある。また各系統の更新の時期とそれに伴う変化要素は明らかになりつつあるが、位置付けが定まらない出土例も依然として存在するため出土資料全体をまとめる上では型式の細分化も課題となる。小札を構成する諸要素から分布を検討することで、製作集団と古墳への副葬例の関係性についての考察が可能になると考える。

3. 緘孔2列5個型小札甲の検討

3-1. 後期以降の緘孔2列型の系譜

終末期以降の奈良期に連続する系譜とされる緘孔1列型小札の導入以後も、緘孔2列型小札は継続して用いられることが確認されている。後期の緘孔1列型と緘孔2列型の異なる系統の並列状態が継続している状態においては、両系統の地域性や時期から、それぞれの系統を用いる集団

の分布の境界を検討することが可能であると考ええる。

上記の課題に対する研究として、後期以降にみられるようになる緘孔2列5個型の型式の細分を行い、その出土の地域的な分布を整理する方法を想定する。

3-2. 緘孔2列5個型の位置づけ

清水の型式分類において「金鈴塚型」「富木車塚型」に分類される2型式は、一部に「緘孔2列5個型小札」を使用する小札甲型式である。各段緘b類技法においては、横方向に隣接する小札へ紐を通すために小札中央部に開けられた第三緘孔と呼ばれる緘孔を用いる。第三緘孔は基本的に下段の小札上部の緘孔へと続くため小札上部の緘孔の直線上に穿孔される必要があり、緘孔1列型であれば1個、緘孔2列型であれば2個が配置される。一方、緘孔2列型の中には第三緘孔を1個のみ配する資料もあり、これは緘孔2列5個型に分類される。

内山の編年においても、富木車塚古墳例・金鈴塚古墳例・割地山古墳例などが胴部各段緘2列5孔として分類されており、出現の時期は後期2段階に設定され終末期の割地山古墳例に至るまで緘孔2列5個型の系譜をたどることができる(内山2006)。

また、より後の時代の遺跡である宮城県仙台市の郡山遺跡や京都府向日市の長岡京史跡から当該型式の小札が出土している点も重要である。7世紀後半の成立とされる官衙の郡山遺跡では、第三緘孔があるものとなないものの2種類の緘孔2列型小札の出土が確認されている。8世紀末の遺構と考えられる長岡京第二次内裏の建造物基壇部遺構からは6世紀後半から8世紀後葉までの4期に渡る型式の小札群が出土しており、その中に緘孔2列5個型がみられる(塚本・山田2012, 栃木県教育委員会2003)。緘孔2列型の系譜は後期中頃より出現し終末期には衰退し途絶えるが、7世紀以降の出土例が存在することから考えて、緘孔2列5個型は限定的な資料例ではなく緘孔2列型の形態のひとつとして確立した型式であったと考えられる。

一方でこの後期の緘孔2列5個型の系統の変遷は明らかではなく、先行研究の編年でもこれに直結する系統とその過程は定まっていない。緘孔2列5個型を用いる小札甲を分類しその分布を調べることで緘孔1列型を用いる集団とは異なる勢力の抽出が可能になると考えた。

4. 緘孔2列5個型小札の分析

4-1. 対象資料

緘孔2列5個型の資料の出土例を整理する。現在確認できているのは国内の後期以降の古墳から出土した14

例となっている。古墳によって小札自体の出土量は異なるため、基本的には緘孔2列5個型の存在が少数でも確認できる資料は分析の対象とした。また緘技法など技術的に普遍性がある要素については、関東以外の地域の資料も参考にする(第6図)。

出土古墳は関東に集中して分布しており、畿内では大型前方後円墳などに副葬例がみられる。後期には畿内の前方後円墳造営は徐々に行われなくなり、反対に関東では後期後半まで前方後円墳の造営が盛んに行われる。後期甲冑の出土古墳分布が関東に偏る理由としてはこの古墳の絶対数という問題を考慮する必要があるが、一方で後期小札甲出土地域の中心である北関東ではそれほど多く出土例が確認できず、千葉・茨城県域にやや集中が見られるのは特徴のひとつである(第7図)。

4-2. 分析視点

緘孔2列5個型小札を用いる資料は甲冑構造が把握できるものから複数枚の小札のみが確認されているものまで含むため、統一的な基準に基づく構造的な分析は望めない。そのため基本的には先行研究に倣った小札資料単体の分析が有用である。具体的には、

- ①小札の緘孔の配置
- ②小札に使用される緘技法
- ③小札の使用部位

の観点に基づき分類を設定する。

4-3. 緘孔の配置

4-3-1. 第三緘孔の配置による形態分類

第三緘孔の配置は、

- ①小札中央部に穿たれるもの
- ②小札中央下部に穿たれるもの

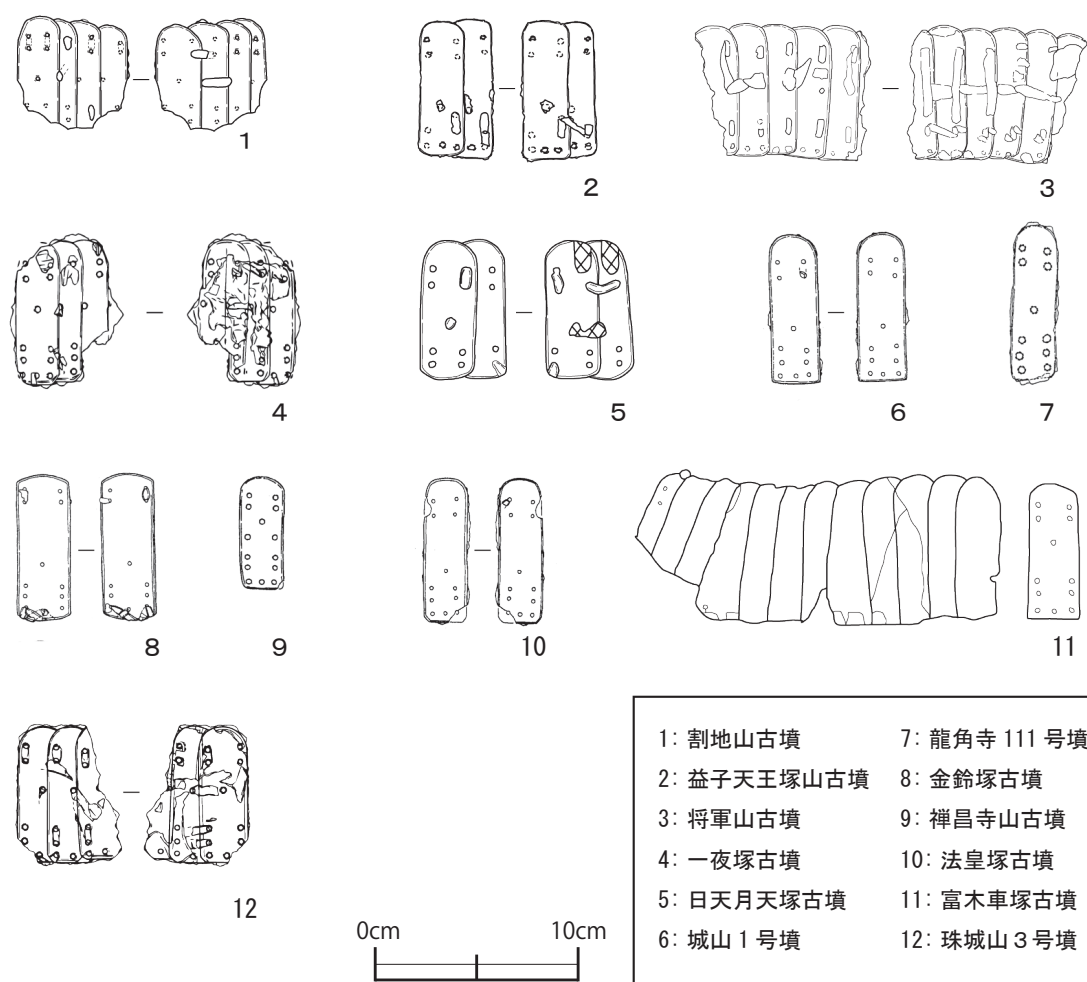
の2種類が確認できる(第8図)。

①小札中央部の第三緘孔

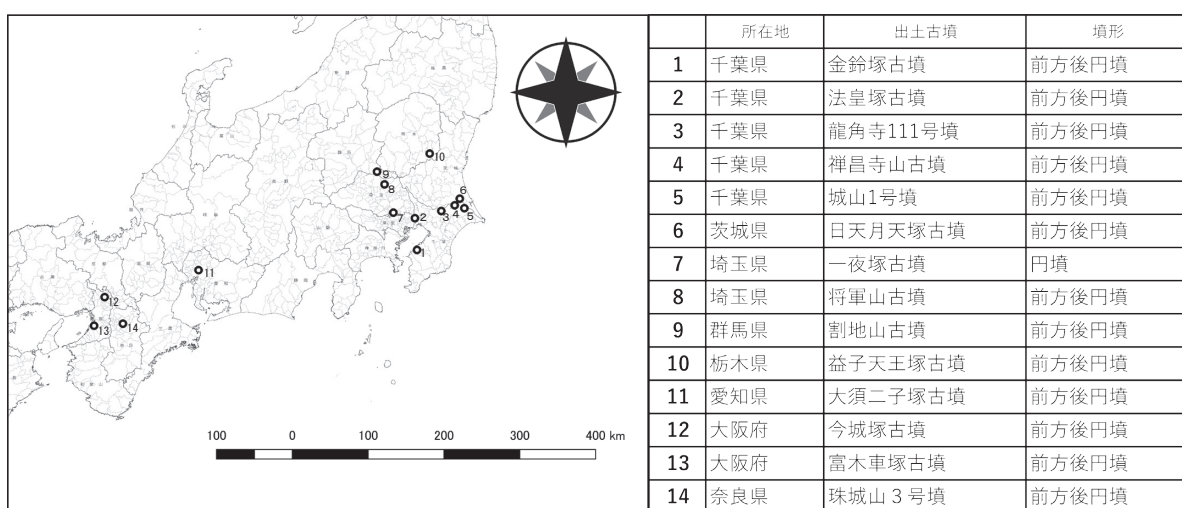
出土資料のほとんどで確認される配置である。1列型小札においても同様の位置に第三緘孔が配されるため、基本的な穿孔位置と考えられる。小札列を複数段重ねた際に下段の小札の頭部に隠れない位置であり、緘による連結を前提とした配置といえる。分類においてはA類とした。

②小札中央下部の第三緘孔

小札の中心より下の綴孔周辺に穿たれた第三緘孔である。一部の資料に見られるがいずれも出土小札総数に比べると数は少ない。錆着により上下の連結状態が保たれている小札甲資料を観察すると、上下の小札列同士の重なりは小札の半分より大きい面積であることが想定され、この配置の小札を用いる部位には各段緘など上下の



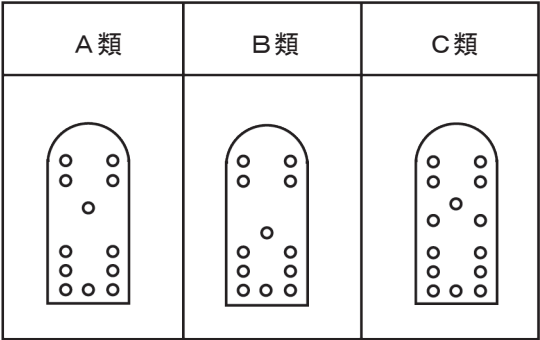
第 4 図 緘孔 2 列 5 個型に分類される小札資料



第 5 図 緘孔 2 列 5 個型小札出土古墳分布図

緘の使用は想定しにくい。益子天王塚古墳例や日天月天塚古墳例などにおいて連結資料が存在しているが、いずれも横方向の痕跡のみが確認できる。特定の段や部位のみに使用されたものと推測される。分類においてはB類とした。

緘孔2列5個小札資料のうち両方の型の小札を含むのは、益子天王塚古墳・日天月天塚古墳・龍角寺111号墳・金鈴塚古墳・禅昌寺山古墳・法皇塚古墳である。またごく少数ではあるが、益子天王塚古墳例および禅昌寺山古墳例では中央部2個の第三緘孔と中央部1個の第三緘孔がひとつの小札に穿たれ計3個の第三緘孔をもつ小札を含む。分類においてはC類とした。



第6図 緘孔2列5個型の形態分類

4-3-2. 第三緘孔の導入

以下で各資料を小札形態分類に基づき整理した（第1表）。資料群はB類小札を含むものと含まないものに大別され、関東出土資料にB類の集中がみられる一方で畿内出土資料はA類小札のみである。

内山は緘孔2列小札の形状変遷を整理する中で、胴部最上段の第三緘孔の導入について検討している（内山2008）。日本出土資料においては、中期末の中期第7段階より胴部最上段の竪上1段目に左右に第三緘孔2孔が配される型式が確認されるようになり、その出現は保渡田八幡塚古墳出土例におかれている。その他の第三緘孔2個小札を最上段に用いる資料には福岡県番塚古墳例や埼玉県永明寺古墳例などがある。

第1表 各資料の形態分類

出土古墳	分類	出土古墳	分類
金鈴塚古墳	A,B	将軍山古墳	A
法皇塚古墳	B	割地山古墳	A
龍角寺111号墳	A,B	益子天王塚古墳	A,B,AB併用
禅昌寺山古墳	A,B,AB併用	大須二子塚古墳	A
城山1号墳	B	今城塚古墳	A
日天月天塚古墳	A,B	富木車塚古墳	A
一夜塚古墳	A	珠城山3号墳	A

第三緘孔が小札の連結に及ぼす影響について、清水は甲冑の伸縮性の多少の面から言及している（清水2000）。小札同士を紐で密着させる綴技法とは異なり、綴技法は蛇腹状の伸縮性を保った状態で小札間に紐がわたされるため伸縮性・可動性が大きい（清水1996）が、小札中央に開く第三緘孔を用いる場合は小札上部の緘孔を用いる方法に比べて小札間の紐が短くなるために伸縮が小さくなる。清水は綴技法の使い分けの理由が機能面にあるとした上で、第三緘孔が用いられる箇所は甲冑の中でも可動性が要求されにくい胴部が主体で、草摺部には可動性の高い技法を用いる場合がほとんどであるとしている。

甲の胴部に第三緘孔のある小札を用いた緘孔2列型小札甲が出現するのは後期後半以降であり、第三緘孔自体の出現とは時期差がある。緘孔2列5個型の登場の時期もこの周辺に求められるだろう。

4-4. 綴技法

4-4-1. 綴技法による分類

小札甲に用いられる綴技法は、主に小札表面に遺存する有機紐の痕跡から復元される。個々の資料の報告においては使用された綴技法を推定し復元しているものがあるため、こうした報告に基づき分類を整理した。

小札中央部に穿たれた第三緘孔から下段の2列緘孔を通すためには、

- ①同じ第三緘孔に2回紐を通す方法
 - ②下段小札列をずらして上段小札中央部の直下に下段小札端部がくるようにする方法
- の2通りを想定することができる（第9図）。

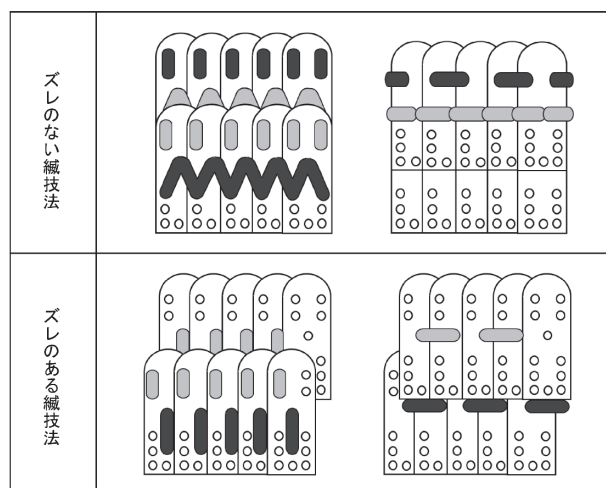
①の方法の場合、第三緘孔2個の小札ではそれぞれ左右2つの第三緘孔を通っている紐が1つの孔を通るが、紐の順序自体は変わらない。裏面からみた際の第三緘孔の横方向の緘は、空白を挟まず直線状を呈するのが特徴である。

②の方法に関しては小札列にズレが生じること以外は第三緘孔2列の場合（通常の各段緘b類）と同じで、紐の通し方にも変化はない。小札列がずれることで列の端部では小札がはみ出すことになるが、竪上や草摺であれば各段ごとに枚数が異なり下段にいくにつれて増えていくためズレは問題とならない。

報告で示されている復元案では、富木車塚古墳例および日天月天塚古墳例が上下にズレの生じない技法、割地山古墳例および金鈴塚古墳例がズレの生じる技法を採用している。いずれの場合も部分的に残る緘紐の方向や重なりなどから想定したものであり確実な証拠とするには問題もあるが、すべての緘孔を用いるとすれば以上の方

法から大きく離れるものではないだろう。

まとまった小札群から緘の痕跡を観察することができる資料は限られているため緘技法によって各小札甲資料を分類することは難しいが、先に挙げたズレの有無は構造的な特徴といえる。



第7図 緘技法の種類による構造の差異

4-4-2. 緘技法と緘孔配置の設計の関係

緘孔2列5個型は1列型と2列型の両要素を含むため、この型式の小札を用いる場合には通常の2列型小札に使用される各段緘技法とは異なる専用の緘技法が用いられたと考えられる。

小札同一個体の甲冑に使用される小札は設計通りの形状でなければ連結することができないため、穿孔の工程は全ての小札同時に行われたと考えるのが妥当である。7世紀後半の飛鳥池遺跡からは小札の穿孔用に使用されたと思われる木製板が出土しており、小札の製作工程では基準となる型が設定されていたと考えられている(津野2002)。時代は異なるものの必要となる技術に大きな差異はなく、古墳時代の小札製作においても同様の設計段階が存在したことが想定できる。2列5個型小札を採用する小札甲は、そうした特殊な設計を採用した製作集団によるものと考えられることができる。

4-5. 第三緘孔使用部位

主に小札の種類は胴部・腰部・草摺部・草摺裾部で分かれるが、小札の種類が機能的な観点から使い分けられるとする清水の論にあるように小札の型式は小札製作時に決まるものと考えられる。緘孔2列5個型小札を使用する部位の違いは製作集団によるものと考え、分析要素のひとつとして検討する。

基本的には資料の報告に記載があるものを採用しているが資料によって第三緘孔小札の遺存度が異なるため、

詳細な部位の特定は行わず、胴部・草摺部で大別した。さらに胴部でも最上段1段のみに用いるものと胴部2段以上に渡って用いるものがあるため、計3種類の分類を設定した(第10図)。

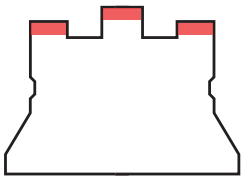
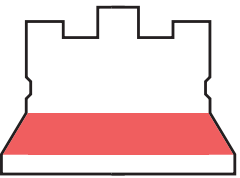
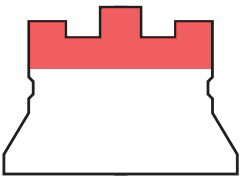
胴部の2段以上で用いられたと考えられるのは富木車塚古墳・日天月天古墳・益子天王塚古墳・一夜塚古墳・龍角寺111号・金鈴塚古墳である。報告に緘孔2列5個型に関する記述がないものに関しては、緘孔2列5個型小札が複数段重なっていることが確認できる資料も本分類に含めることができると考える。

胴部最上段の竪上1段目のみに用いる資料は、今城塚古墳・大須二子塚古墳・珠城3号墳・將軍山古墳である。いずれの資料も他の部位には通常の緘孔2列4個型小札を用いている。大須二子山古墳・珠城3号墳・將軍山古墳で少数出土した第三緘孔小札は、いずれも内側に残る布繊維痕や緘紐から最上段のみに配され肩から甲を懸架する際のワタガミの綴付けに用いられたと思われる。上部の緘孔がワタガミ綴付け用であり、中央の第三緘孔より甲の緘連結が始まるものと推測される。

珠城山3号墳では、第三緘孔小札のほかに腰札と草摺裾札と思しき小札が局所的に出土している。この出土状況については報告において大部分に革製小札を用いていた可能性が提示されており、重要な部分にのみ鉄製小札を用いたとする見解がなされている(初村2018)。この部位にのみ用いられる小札は、こうした最上段部位の構造の特殊性によるものと評価できる。

草摺部に用いる例は割地山古墳例でのみ確認できる。割地山古墳例は胴部には第三緘孔2列小札を使用し、草摺部には第三緘孔1列小札を使用するという技法復元案が提示されている(大田市教育委員会2000)。

使用部位の分類では緘孔2列5個型が胴部への適用が主体であることが確認できる。緘孔位置の分類においてB類とした小札は、胴部で使用する資料でのみ確認されており、最上段で使用する甲では見られない。第三緘孔がある小札を2段以上重ねる際に用いられる種類の小札だと考えられる。城山1号墳・禅昌寺山古墳・法皇塚古墳出土の資料においては、資料数が少ないため緘技法や使用部位が判明していないが、B類小札を含むことが確認されている。これらの資料についても胴部での適用の可能性が高いと思われる。こうした緘孔2列5個型を胴部複数段に用いる型式については、ワタガミ綴付けという機能的前提からは離れたものであるため設計思想が異なるものと評価できる。

緘孔2列5個型 使用位置	竪上最上段	草摺	胴部（竪上・長側）	
				
緘技法分類		ズレあり	ズレなし	ズレあり
出土古墳	今城塚古墳 珠城山3号墳 大須二子塚古墳 將軍塚古墳	割地山古墳	富木車塚古墳 ◎日天月天塚古墳	◎益子天王塚古墳 一夜塚古墳 ◎龍角寺111号墳 ◎金鈴塚古墳

◎… B類（第三緘孔が下部にあるもの）を含む資料

第8図 緘技法の種類による構造の差異

おわりに

緘孔2列型においても系統の違いが存在する可能性を指摘したが、この差異が製作集団の違いを表すものであるとするには資料の蓄積と分析要素の追加が必要となる。また一部型式には地域的な集中が見られるため、関東東南部の古墳出土の小札甲との比較を通して地域性の可能性についても追求する。

今回提示した特定の型式に着目する方法のみでは資料数の不足や出土地域の偏りの可能性という問題を解消するには至らず、また限定的な資料に着目することで狭小な分析にとどまる可能性もある。後期から終末期にかけての関東域出土資料全体の中での資料の位置づけを明確にしていくことを今後の課題としたい。

引用・参考文献

内山敏行 2000「保渡田八幡塚古墳の小札甲」『保渡田八幡古墳』調査編、459-473頁、群馬町教育委員会。

内山敏行 2001「外来系甲冑の評価」『古代武器研究』2。

内山敏行 2004「武具」『千葉県の歴史』資料編考古4（遺跡・遺構・遺物）、832-843頁、千葉県史料研究財団。

内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』7、19-28頁、古代武器研究会。

内山敏行 2008「小札甲の変遷と交流—古墳時代中・後期の緘孔2列小札とΩ字型腰札」『王権と武器と信仰』、708-717頁、

同成社。

内山敏行 2011「小札甲（挂甲）—北関東西部における集中の意味—」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学別冊17、153-157頁、雄山閣。

内山敏行 2012「装飾付武具・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳』豊橋市埋蔵文化財調査報告120、313-324頁。

大田市教育委員会 2000『市内遺跡16 東矢島古墳群』太田市教育委員会指導部文化財保護課。

岡本健一 1997『將軍山古墳』確認調査編・付編 埼玉県教育委員会。

小見川町教育委員会 1978『城山第一号前方後円墳』小見川町教育委員会。

神谷正弘 1988「富木車塚出土挂甲の復元製作」『考古学論集』2、143-157頁。

小林謙一 1988「古代の挂甲」『歴史学と考古学 高井悌三郎先生喜寿記念論集』、269-284頁、同記念事業会。

小林三郎・熊野正也 1976『法皇塚古墳』市立市川博物館研究調査報告第3冊 市立市川博物館。

阪口英毅 2019『古墳時代甲冑の技術と生産』同成社。

清水和明 1993a「挂甲—製作技法の変遷からみた挂甲の生産」『第33回 埋蔵文化財研究集会 甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』、13-27頁、埋蔵文化財研究会。

清水和明 1993b「挂甲の技術」『考古学ジャーナル』366、27-30頁。

清水和明 1996「東アジアの小札甲の展開」『古代文化』48、1-18頁。

清水和明 2009「小札甲の製作技術と系譜の検討」『考古学ジャー

ナル』581、22-26 頁。

末永雅夫 1944『増補日本上代の甲冑』 創元社。

末永雅夫 1979『挂甲の系譜』 雄山閣出版。

鈴木一有・高橋達也 2014『古墳時代甲冑集成』 大阪大学大学院
文学研究科考古学研究室。

千葉県史料研究財団 2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告
書 第1分冊』 千葉県史料研究財団。

塚本敏夫・山田卓司 2012「長岡京出土小札の再検討」『財団法人
向日市埋蔵文化財センター 年報 都城』23、27-50 頁、
(財)向日市埋蔵文化財センター。

津野 仁 2002「小札の製作について―武具生産の一考―」『研究
紀要』10、51-77 頁、とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化
財センター。

栃木県教育委員会 2003『律令国家の誕生と下野國―変革の7世
紀社会―』 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館。

初村武寛 2011a「一夜塚古墳出土甲冑の位置づけ」『一夜塚古墳
出土遺物調査報告書』、69-81 頁、埼玉県朝霞市教育委員
会文化財課文化財保護係。

初村武寛 2011b「古墳時代中期における小札甲の変遷」『古代学
研究』192、1-17 頁。

初村武寛 2017「古墳時代の武装と付属具」『考古学ジャーナル』
701、10-14 頁。

初村武寛 2018「奈良国立博物館蔵大和二塚古墳・珠城山三号墳
出土遺物の調査―平成二十五～二十六年に行った保存処
理により得られた知見から―」『鹿園雑集』20、51-71 頁。

初村武寛・小村真理 2015「今城塚古墳出土小札の構造と復元」『よ
みがえる古代の煌めき 副葬品にみる今城塚古墳の時代』、70-71 頁、高槻市立今城塚古代歴史館。

藤原郁代 1995「群馬県天ノ宮古墳出土挂甲の復元」『古墳文化と
その伝統』、金関恕・置田正昭編、427-449 頁、天山舎。

松崎友理 2012「九州出土甲冑から見た対外交渉―胴丸式小札
甲を中心に―」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』、
267-281 頁、第15回九州前方後円墳研究会北九州大会実
行委員会。

森川祐輔 2009「大須二子塚古墳の甲冑―小札甲を中心に―」『南
山大学人類学博物館オープンリサーチセンター 2008
年度年次報告書 付編 研究会・シンポジウム資料』、
18-24 頁、南山大学人類学博物館。

吉村和昭 1988「短甲系譜論」『橿原考古学研究所紀要 考古学論
考』13、23-39 頁、奈良県立橿原考古学研究所。

山田琴子 2011「益子天王塚古墳出土遺物の調査(5)―挂甲―」『研
究紀要』13、97-111 頁、早稲田大学會津八一記念博物館。

横須賀倫達 1998「常陸日天月天塚古墳」『茨城大学人文学部考古
学研究報告』2、134-138 頁、茨城大学人文学部考古学
研究室。

図表出典

第1図 鈴木・高橋 2014 をもとに筆者作成

第2図 清水 1993a より引用

第3図 初村・小村 2015 より引用

第4図 清水 1993a より引用

第5図 内山 2006 より引用

第6図 1: 大田市教育委員会 2000、2: 筆者作成、3: 岡本 1997、
4: 初村 2011a、5: 横須賀 1998、6: 小見川 1978、7: 千
葉県史料研究財団 2002、8・9: 内山 2004、10: 小林・熊
野 1976、11: 神谷 1988、12: 初村 2018 より引用

第7図 国土地理院基盤地図をもとに筆者作成

第8～10図 筆者作成

第1表 筆者作成